



Title	日本語と中国語の話し言葉における文末の代名詞
Author(s)	汪, 聞君
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/89586
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (汪 聞 君)

論文題名 日本語と中国語の話し言葉における文末の代名詞

論文内容の要旨

本研究は、SOV型の膠着語である日本語と、SVO型の孤立語である中国語の文末に置かれる人称代名詞と指示代名詞について考察するものである。この2つの言語は、下の(1)～(4)に示したように、基本語順こそ異なっているものの、話し言葉において代名詞が文末に置かれる場合のみを考えれば、非常に似通った構造を持つと言える。

(1) (2) はそれぞれ日本語と中国語で人称代名詞が文末に置かれる例、(3) (4) はそれぞれ指示代名詞が文末に置かれる例である。

(1) バカだなわたし。

(ここにある (2017年4月25日) 「バカだなわたし。」

<http://clichang.hatenablog.com/entry/2017/04/25/161442> 2022年5月1日最終閲覧)

(2) 太没节操了我。

なんて節操ないの、私。(『歡樂頌』第1期第1話)

(3) なんだこれ！(『ひよっこ』第31話)

(4) 什么人啊这。

どんな人だよこれ！

(<https://baobao.baidu.com/article/e990d6e160f16d23239c3e08a0bd8310.html> 2022年5月1日最終閲覧)

本研究の構成は以下のとおりである。

まず、第1章では、次のように研究の背景と目的を述べ、論文全体の構成を示す。

まず、従来、話し言葉ではかなり頻繁に用いられる(1)～(4)のような、通常は文中にある言語形式が文末に置かれる現象は、一般に、「後置文」と呼ばれてきたことを確認する。先行研究の定義では、従来後置文と呼ばれてきた現象についても説明を与えられず、かつ、本研究で取り上げる多様な現象も扱えない点が問題となることを指摘する。さらに、先行研究は代名詞が文末に置かれる場合について分析する際の新たな視点を与えた点では意義深いものの、(w) *atashi* 以外の人称代名詞、「それ」以外の指示代名詞の文法化現象については言及がない点も問題点である。

先行研究がそのような問題点を抱えることを踏まえた上で、西村(2015、2016)の研究に着目する。西村の研究は、語気助詞化(文法化)の観点から、中国語における人称代名詞及び副詞の複用や後置について総括的に考察したものである。このような背景の下、本研究は主に以下の4つを目的とする。

- 1) 中国語の文末要素(人称代名詞と副詞)に関する西村(2015、2016)の指摘が、日本語の文末における人称代名詞にも適用可能かどうかを考察すること。
- 2) 1) の考察から得られた結果に基づいて、日本語と中国語の指示代名詞にも西村の指摘が適用可能かどうかを検証し、指示代名詞の持つ態度表出機能を分析すること。
- 3) 文末における代名詞と、天野(2008)による「拡張(何ヲ)とがめだて文」との類似性を記述的に明らかにすること。

4) 話し言葉における「文末」という統語的位置の重要性について議論した上で、「文末」を重要たらしめる原理を明らかにすること。

第2章では、先行研究を概観し、2つの問題が残されていることを指摘する。

一つ目の問題は、後置文について、従来、後置要素は移動されてきたものであるという分析（「移動説」と呼ぶ）や、追加のために置かれるものであるとする分析（「追加説」と呼ぶ）に関するものである。先行研究によるこれらの分析では、従来後置文と呼ばれてきた現象だけでなく、本研究で取り上げる多様な現象について説明を与えることができない。具体的には、先行研究では扱えない現象として、本研究では、通常語順の文と後置文の共起する現象、文末に複数の代名詞がある現象、複用現象、文末の人称代名詞と指示代名詞が共起する現象、文頭に一人称代名詞が現れ、文末に二人称代名詞が現れる現象、通常語順の文と後置文が共起して発話された後に、さらに複用文が用いられる現象を取り上げる。

二つ目の問題は、後置文に現れる代名詞の機能に関するものである。後置されている代名詞は、構文上余剰な成分であることから、指示機能を持たないと考えられる。この点に関して、先行研究でも、Ono & Thompson (2003) は、一人称代名詞には指示 (reference) だけでなく、“emotive function” (態度表出機能) もあることを指摘している。この点については評価できる一方、態度表出機能は (w) *atashi* にしか見られないとする主張には問題がある。また、文法化の視点から後置文「何それ」を分析した大野・中山 (2017) についても、文法化を想定することで、後置文を文法レベルの議論に落とし込んだ点は評価できる一方、「それ」以外の指示代名詞における態度表出機能について言及がない点は問題である。

第3章では、中国語における人称代名詞の複用や後置について考察した西村 (2015, 2016) を取り上げ、その理論的枠組みを用いて日本語の文末における人称代名詞を分析した。その結果、以下の5点が明らかになった。

第一に、中国語の人称代名詞が文末に置かれる現象について、具体的に6つの現象を観察することができた。それは、通常語順の文と後置文が共起する現象、後置文が通常語順の文と共起せず単独で用いられる現象、複用の現象、通常語順の文と後置文が共起し、かつ、複用文も用いられる現象、人称代名詞と指示代名詞が複用要素として共起する現象、文頭に一人称代名詞が、文末に二人称代名詞がそれぞれ現れる現象である。これに対して、日本語の人称代名詞が文末に置かれる現象としては、具体的に3つの現象を観察することができた。それは、複用の現象、文末に複数の人称代名詞が置かれる現象、後置文の現象である。

第二に、以上のすべての現象について、具体例を通して、従来の統語分析、つまり「追加説」と「移動説」のいずれによっても説明できないことを示した。

第三に、日本語の人称代名詞も中国語と同様、文末に置かれることで、もともと有していた指示機能が希薄化し、話し手の態度表出機能を獲得することがわかった。一人称代名詞が文末に置かれる場合には、話し手の悔しさ、やるせなさ、申し訳なさ、恥ずかしさ、心配、つらさ、悲しさ、嬉しさ、困り、自信のなさ、顕示欲、自嘲などの気持ちが読み取れる。一方、文末の二人称代名詞は、聞き手への蔑みや、予期に反する事象に起因する驚きなどの態度を表す傾向が強い。

第四に、3点目の指摘から分かることとして、二人称代名詞に比べて、一人称代名詞の方が文末に置かれた際により多様な態度を表出しうると言える。この点においても、日中両言語の特徴は共通している。

第五に、日本語では、中国語と同様に、態度表出機能は一人称代名詞、二人称代名詞、三人称代名詞のいずれにおいても観察できた。

第4章では、ベトナム語とタイ語の指示代名詞の文法化を参考に、第3章で論じた人称代名詞の分析結果を基に、文末に指示代名詞が置かれた場合の日中後置文の態度表出機能について考察した。また、代名詞が文末に置かれる文と「拡張 (何ヲ) とがめだて文」との類似性を論じた。第4章の指摘は以下の8点にまとめることができる。

第一に、中国語の指示代名詞が文末に置かれる例として、具体的に3つの現象が観察される。すなわち、複用、後置文、複数の指示代名詞による後置文である。これに対して、日本語の指示代名詞が文末に置かれる例としては、具体的に2つの現象が観察される。すなわち、後置文と、指示代名詞と人称代名詞が文末に共起する後置文である。

第二に、これらの現象はいずれも、従来の分析である「追加説」と「移動説」によっては説明できない。

第三に、中国語と日本語の指示代名詞は、人称代名詞と同様、文末に置かれることで、もともと有していた指示機能が希薄化し、話し手の態度表出機能を獲得している。ただし、態度表出機能は日本語ではコ系、ソ系、ア系のいずれにも観察できるのに対して、中国語では、近称代名詞“这”のみに観察され、遠称代名詞“那”には観察されな

い。

第四に、日本語における指示代名詞の態度表出機能は、大野・中山（2017）が指摘した「それ」以外にも、コ系とア系にも観察される。

第五に、日本語の指示代名詞に関して、ソ系はコ系やア系に比べ、より文法化している、あるいは、より文法化しやすい。

第六に、日本語の「疑問詞＋指示代名詞」の形は、頻繁に使われることによって固定化した表現になりつつある。

第七に、指示代名詞が文末に置かれる文は、話し手の驚き、拗ね、嬉しさ、怒り、不満などの気持ちを表す。

第八に、代名詞が文末に置かれる文も、「拡張（何ヲ）とがめだて文」も、疑問語疑問文の表す非難とは異なり、聞き手に補充説明を要求しない。また、「拡張（何ヲ）とがめだて文」は非難のみを表す形式であるが、代名詞が文末に置かれる文は、非難のみならず、多様な態度を表す。

第5章では、日本語と英語の対照を通して、代名詞が単独で文末に置かれた場合に、文法化現象が観察できる条件を明らかにした。そして、日本語と中国語を対照しながら、SVO型である中国語でも日本語と同様の現象が見られることを指摘し、「文末」という統語的位置を重要たらしめる原理は、日中両言語に共通するもの、さらには、ベトナム語やタイ語にも共通して働くものであることを議論した。その結果、以下の4点が明らかになった。

第一に、代名詞が単独で文末に置かれて文法化する現象は、屈折語には見られず、日本語のような膠着語、あるいは、中国語やベトナム語やタイ語などの孤立語の特徴である。

第二に、このように多彩な文末現象が見られるのは、日本語、中国語、ベトナム語やタイ語が文末助詞を有することに強く関係している。

第三に、代名詞が文末に置かれることは、話し手の態度を表すストラテジーの一種である。

第四に、話し言葉における「文末」という統語的位置を重要たらしめる原理は、その位置で「陳述」が働くからである。

以上の論述の後に、本研究が持つ意義と、今後の課題について述べる。藤原（1998）は、「世界の諸言語にわたって、文末詞相当のもの、ないしは文末詞的なものの検討されることが願わしい。文末詞言語学とでも言うべきものの、広大に樹立されることが願望される」と述べているが、本研究は、文末における日本語と中国語の人称代名詞と指示代名詞の文法化現象、さらに「文末」という重要な統語的位置を支える原理を明らかにすることで、同様に文末助詞を有する東南アジア諸語の分析にも寄与しうるものである。すなわち、本研究によって、言語研究は藤原の大きな夢に一步近づくことができたと言える。今後の課題としては、数ある品詞の中でもとりわけ「人称代名詞」と「指示代名詞」が文末に置かれることで文法化現象を引き起こす理由について検討することが残されている。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (汪 聞 君)			
論文審査担当者	(職) 氏 名		
	主 査	教 授	莊 司 育 子
	副 査	教 授	岸 田 泰 浩
	副 査	准教授	山 川 太
	副 査	教 授	古 川 裕
	副 査	教 授	今 井 忍

論文審査の結果の要旨

本論文は、「何をしているんだ、私。」のように、言語形式上は完結している述語文の文末に代名詞が単独で付け足され、全体で一文となっている表現文型について考察したものである。一般には後置文や倒置文としても認知されるものであるが、とりわけ代名詞が単独で（無助詞で）表れるさまは、口頭表現特有のものである。このような表現文型は、通常は破格の類に属するものとして、正面から議論されることはまづなかった。そのような背景において、本論文はとりわけ、日本語と中国語という全く系統の異なる言語間においてもそのような文型が存在することを網羅的に示し、そこに言語の普遍性を見出そうとした点が高く評価できるものとなっている。

まず、本論文の独創性についてであるが、当該の表現文型そのものについては、これまで網羅されたものはなかったとは言え、単発的にはたびたび議論の俎上にあったものである。しかしながら、位置づけとしては後置文をはじめ、ある種の規範から逸脱したものという扱いで考察されるのが常であった。本論文では、その議論の土台となっていた後置文そのものの定義から異議を唱え、文末の代名詞には積極的な存在意義が認められることを主張した点で注目に値する。

また、継承性という観点においては、特に中国語学で既に議論になっていた論考を日本語の分析に巧みに取り入れた点に認められる。日本語における議論は、これまで後置文の枠組みから脱却できなかったことにより、特に言語運用の面から見れば明らかに説得力の欠けるものであった。そこに、「複用」や「延伸文」といった中国語学由来の概念を援用することで、当該の表現文型の存在意義が浮き彫りになったと言える。

本論文の実証性については、文末に人称代名詞、指示代名詞の類が出現するすべてのパターンについて実例を収集して挙げた点、そして、それらの代名詞の語性や疑問詞（「何」など）と共起しやすいことなど、統語的な環境にも目を向けたうえで、一連の主張が展開されている点にあると言える。ただ、その主張点でもある、文末の代名詞のもつ「態度表出機能」が客観的にどう認められるのかという問題は、そう簡単に導き出せるものではないとは言え、本論文では自明であるかのような取り扱いとなっている点は看過できないところではある。

また、本論文の論理性ということについては、概ね首尾一貫した記述となっており、いずれの章においても問題設定と考察の道筋が的確に示され、矛盾は見られない。特筆する点としては、本研究の考察対象となっている日本語と中国語以外の言語についても若干ではあるが潜在的な可能性に言及していること、そして、「拡張〈何ヲ〉とがめだて文」といった言語現象に関連性を見出すなど、傍証となるような論拠を挙げていることである。また、やや論拠に乏しい点はあるものの、本論の最終章では文末という統語的環境について深く掘り下げた議論を行っており、当該の表現文型の存在意義を重ねて主張しようと、粘り強く論証に挑んだ軌跡が読み取れる。

最後に、本論文の明確性についてであるが、執筆者にとって日本語は外国語であるにもかかわらず、全体にわたって極めて正確で適切な記述が施されている。それぞれの章には、論点とその帰結を簡潔に総括しておくことで、議論の理解が容易に進むように設計されている。もっとも、未熟さゆえに、惜しまれる点も少なからず見受けられたことは言うまでもないが、これらは最終評価の判定に影響を及ぼすものではなく、今後将来にわたって改善が期待できるような事柄であり、大きな瑕疵ではない。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会では、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断し、委員の総意により合格と結論づけた。